

『キリストにならいて』

2016年07月22日

『キリストにならいて イミタチオ・クリスチ』はキリスト教書の中で揺るがない古典である。多くの人々に大きな影響を与えてきた。私は最初にいつ読んだか覚えてないが、何年か毎に、読み返してきた。その度に、心洗われるような感銘を受ける。

『キリストにならいて』はトマス・ア・ケンピスが著者とされていたが、原著者は、ヘーラルト・ホロートであって、ケンピスが翻訳、編集したようだ。ホロートは地上の一切を捨て、一心にキリストの足跡に従おうとした生き方と説教は人々に多大な感化を与えた。しかし、教会と聖職者の腐敗を指摘したため不遇をかこち、晩年、黒死病にも侵された。弟子たちに「人は神の定めに従って何事もなし得ない。わたしが天に帰ったならば、この世に花の雨を降らせるであろう」と言って、瞑目した。享年44歳であった。彼が天に帰った後、言葉通り、花の雨を降らし始めた。彼の遺稿『キリストにならいて』に、著者の名は冠せられなかったが、修道士たちに手渡されていき、まさに慈雨となった。この宗教的古典を読んで、救いと力と慰めを受けた人は、どれほどの数になるであろうか。

第1巻 第7章 むなしい希望と誇りとを避けるべきこと 1 人間または被造物に信頼をおく人は愚かである。2 むしろ自分の造り主にのみ信頼をおけ、神のために他人に仕えることを恥とするな。神に信頼を置くことを、ヨハネ福音書8章32節に「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」と書いている。神のみを神とする時、平安と自由を得る。自由について、パウロはガラテヤ書5章13節bで「この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい」と言っている。

第20章 孤独と沈黙とを愛すべきこと 42 天にいます神にあなたの目をあげるがよい。そしてあなたの罪と過失とのゆるしを祈るがよい。44 あなたの戸を閉じて、愛するイエスを迎え入れよ。罪と咎に対する感性が研ぎ澄まされる時、赦しの恵みがいかに大きいかを知ることができる。そのためには、戸を閉ざした孤独と沈黙が必要である。

第23章 死について静思すべきこと 15 幸いなのは、常に死の時を目前におき、日々死の備えをみずからする人である。16 もし誰かの死を目撃したら、自分もまた同じ道を行かねばならぬと思うがよい。「メント・モリ（死を覚えよ）」は名言である。私は牧師として、多くの方々と地上での別れをしてきた。そして、その方々から多くを教えられてきたことは何よりの宝である。死が新たな生を生み出していくのである。

第2巻 第1部 第1章 内的生活について 31 キリストと共に栄冠を受けたいと望むならば、キリストおよびあなたの隣人の苦しみを共にしなければならぬ。パウロはフィリピ書3章10節、11節で「わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」と書いている。確かな救いに与るためには、隣人の苦しみを共に負うことである。その反対を、第4章 純真な心と素朴な意図とについて 14 人は生ぬるくなり出すと、わずかな労苦をも厭い始め、外部の慰めに熱心になる。人は安易な生活に墮し易いが、そこでは、生きることの充実はない。だから、第11章 イエスの十字架を愛する者の少ないこと 1 今やイエスの天国を慕う者は多くある。しかし彼の十字架を負う者は少ない。2 彼の慰めを求める者は多い。しかし彼の艱難を願う者は少ない、と警告している。

14世紀の書物であるから、現代人とは宗教の捉え方がかなり違い、戸惑いもあるが、キリストにならう霊性は時代を超えて、伝えられていく。